

ポスター6

ポスター発表(研究)

JSLの子どもと比較対象とする日本語モノリンガル小学生の助詞知識
—記述式助詞テストにおけるモノリンガルの結果より—

西川朋美(お茶の水女子大学)・青木由香(富山県西部教育事務所外国人相談員)

研究背景 西川・青木(2018)では、日本生まれ育ちの日本語を第二言語とする(以下、JSL)子どものコロケーション知識について、母語話者と変わらない日常会話能力を持ったJSLの子どもであっても、同年齢の日本語モノリンガル(以下、Mono)とは差があることを、記述式調査票を用いた量的調査によって明らかにした。同調査で対象となった名詞と動詞のコロケーションについては、一部の問題の正答には助詞の知識が不可欠である。上記調査場面に限らず、正確な助詞の知識は、日本語の正確な運用には欠かせない。本プロジェクトでは、JSLの子どもへの助詞の知識に関する調査を行った。本発表では、まず比較対象となるMonoの子どものデータについて報告する。

調査方法 公立小学校2校における全校調査には、小1~6まで約1300名が参加した。本発表では、そのうちMono 834名を分析対象とする。助詞テストは、発表者が本調査のために開発したものであり、「が」「を」「で」「に」の4つの助詞について、JSLの子どもが苦手であることが予想される問題(例:移動の経路を表す「~を」)が多数含まれている。全問題にイラストが添えられている。問題数は、高学年73問で、低学年はその一部を抜粋した40問で調査を行った(1問で複数の助詞を問う問題も多数あり)。

結果と考察 結果は、以下の表の通りである。

	人数	平均	標準偏差	最高点(満点)	最低点
小1	141	50.0	4.4	54	34
小2	127	51.3	3.8	54	22
小3	139	52.1	2.4	54	43
小4	143	110.4	6.7	117	55
小5	142	111.5	4.9	117	85
小6	142	111.2	5.1	117	90

先行研究では「Monoの最低点」がJSLデータ分析の際の一つの基準にされている。表の数値に対して、本発表では本調査のMonoの結果の扱い方について議論する。

引用文献 西川朋美・青木由香(2018)『日本生まれ・育ちの外国人の子どもの日本語力に潜む盲点—簡単な和語動詞での隠れたつまずき—』ひつじ書房